

## アイデンティティ確立過程における“書く作業”の実践報告

志村 路

グリーンビル日本語補習授業校

roadmichi@hotmail.com

**要約** 継承語学習者にとって「書く」技能を身につけるのは、その他の3技能に比べ非常に難しく、多くの問題を抱える。「てにをは」「漢字」「文章構造」などが特に書けない、理解できないという特徴がある。もちろん、日本語の総合的な言語能力の問題とも関わってくるが、それ以前の問題を打破する方法を実践報告としたい。第一に現地校を主とするアメリカ生活の中で、日本語で何かを「書く」という機会がないことがその能力をすぐに退化させる原因となる。第二に、継承語学習者の日本語に対する苦手意識が書くことに対して特に意欲喪失させる原因となる。しかし、それは継承語学習者のみの問題ではなく、日本で学ぶ一般的な生徒たちも「書く」ことそのものが嫌いという場合が多い。それは、これまでの授業内での書く作業がどうしても「評価」される対象であることも往々にしてある。そこで、いかにして書く機会を増やし、書くことに慣れさせ、好きにさせるかという点を考慮した上での「書く」作業の実践報告と実践結果としての生徒の反応、変化を見ていきたい。また、滞米年数による違いを分析する。最終的に「書く」ことの習慣化が彼らのアイデンティティ確立ににどう関わっているのか考察する。

### Ⅰ 様々な“書く分野”

作文・小論文・読書感想文・テスト時の要約・手紙・ハンド・アウト・詩歌小説・キャッチ・コピー（宣伝文句）・板書・書記（講義のメモ・聞き取り）E-Mail Etc.

以上の作業を「受信型」：収集した情報を整理し、理解に役立てる 「発信型」：自分を表現し、伝える手段 に分類したい。

## II “書く” 目的と得られる効果

- 1) 正しい文法・漢字の確認
- 2) 語彙の増強
- 3) 内容理解の確認
- 4) 口語体と文語体の使い分け
- 5) 各フォーマットに合わせた書き方
- 6) 自分の気持ちや考えを整理することで自己を客観的に見つめる
- 7) 論理的に考える力
- 8) 言語感覚
- 9) 創造性
- 10) 自分を自分の言葉で表現し伝える

## III アンケート結果と分析（当補習校の高校生クラスでアンケートを実施した。対象は、1～3年生の計13名。内訳：米国生まれ2名。在米6～10年6名、4年以下5名）

### 嫌いな“書く作業”上位5位

- 1 小論文・作文
- 2 読書感想文
- 3 公式な手紙
- 4 テスト時の要約
- 5 エッセー
- 6 俳句・短歌・詩
- 7 プレゼンテーション用のレジュメ

対象者の挙げる理由に“面倒くさい・硬い・自由ではない・人に見せると思うと緊張

する・苦手・決まりがあるとそれに縛られて書きたくなくなる・経験がない“などがあるが、これらが近い将来、受験や常識として必要不可欠であることも彼らは理解している。

これらの書く作業を分析すると、書くためのストラテジーと文語体で書く事から豊富な語彙が必要であり、理解力・創造性・論理的思考も求められる。日本語で書く機会が少ない継承語学習者にとっては高度な作業と言えるだろう。また、学校ではこれらが主に評価の対象となり、教師に提出するのみで発信型にはなりにくい。

#### 嫌ではない“書く作業”上位5位

- 1 詩 ※以下に報告する“書き作業”の影響が出た回答
- 2 E-mail
- 3 手紙（友だち）
- 4 日記 ※生徒の約半分は自主的に日記を書いた経験があるが長続きしない
- 5 自由なスタイルのもの、歌詞、エッセー、小説

理由に“楽しい・気が楽・自己を表現しやすい”が挙がる。E-mail 以外は積極的に書くわけではないが自分や身近な対象を書き留めておく作業、誰かに発信する作業が同時に見られるのが大きな特徴である。またこれらは自由形式で口語体の傾向が強いが感受性・創造性が必要となる作業である。友達・身近なこと・自分自身が常に対象となっていることから10代がアイデンティティ確立期であることを示しているとも言えるだろう。

こうした結果と分析から書く事に対する苦手意識と嫌いな理由を以下にまとめる。

- ①アメリカ生まれ、在米期間の長い生徒にとって書くことは最もハードルが高いだけでなく、課せられるトピックの内容も中高生になると難しくなるので、一層書く事に抵

抗を覚える。

② 中学、高校になるにつれ、周りの目が受験や入試等の結果に向き、生活そのものを書く機会は小学生の時より格段に減る。

③ “昨今の大学入試向け小論文指導の影響を強く受けている日本人学生は、文章表現の価値を「評価者による評点」に求める傾向が著しく（略）教師による高所からの作文評価と捉えている。”（日本語教育 2000 年 7 月 106 号「留学生と日本人学生の作文交換活動における個人心理過程」徳丸智子）

④ 生徒の嫌悪感を抱かない“書く作業”は口語体なので受け入れられない傾向にある。

#### Ⅳ 実践例（カキナレ＝書き慣れ 別名：心のアルバム、文字のアルバム）

初めに書く事に壁を感じさせない以下の条件を作る。

- ① 評価されない（文章の良し悪しではなく、中身を重視）
- ② 対象は身近なこと
- ③ 形式は自由で、話し言葉でも良いことにする。
- ④ 楽しい

**目的** 書く事に慣れる。今しかない十代の自分を見つめるため。週一度しか会えない補習校のクラスメートに自分を知ってもらう。（コミュニケーション手段＝発信型）

**方法** 1) 生徒各自にノートを用意。ペンネームをつける。  
2) テーマや形式は自由。家で書き補習校で提出。（提出は自由）  
3) 教師は“てにをは”と漢字のみを直し、返事を書き（赤ペン使用禁止＝評価していないという教師の意思表示）ノートを返却。

→生徒と教師のインターアクション・内容にフォーカスを置くことで、日本語に苦手意

## のある生徒へのハードルを低くする

4) 生徒の書いたままの状態タイプし配布。→自筆による先入観を防ぐ

5) 教師が授業時に朗読して、感想を全員で言い合う。(注1)

→読まれることを前提とした推敲の必要性・自己作品に対する客観視・表現の達成感・生徒同士のインターアクション・生徒主導の推敲作業(ピア・コレクション=生徒同士が文法や表現の訂正や評価をすることで教師による評価より高い効果が得られる)

6) 年度末に一冊にまとめる。→達成感・表現意欲高める・自分史

※時々テーマを与える必要もある 注1) 学級内に自分を開放できる雰囲気が必要。

**経過** 元々書くことが好きな生徒はすぐに書き始めるが提出率は低い。2、3ヵ月後、少しずつ書く生徒が増え始める。今週読んだものや授業内容に感化、刺激されて書く生徒も出てくる。提出率が上がるにつれスタイル多様化。自分の悩みを吐露するような内面を表現するものが徐々に増え始める。詩、小説など文学性、創造性の高いものを書く生徒が現れる。

### **生徒の反応** (アンケート結果より)

Q カキナレをどう思いますか?

とても好き 5人    好き 6人    まあまあ 2人    嫌い 0人

Q その理由

楽しい。自由だから。宿題ではない。自分の感情をそのまま表現できる。他人を気にしないでいい。友達の本音が聞ける。友達のを読むのは楽しい。書き方を参考にできる。表現を試せる。

Q カキナレを始めて変わったこと、進歩したこと

少し書くことが好きになった。抵抗がなくなった。嫌いだった詩に偏見がなくなり、作詞をする

ようにまでなった。文章が身近になった。

多様な表現力がついた。自分の気持ちを表現することに喜びを感じるようになった。

#### Q 書くことが自分自身に影響したこと

自分に向き合えた。自分について考えるようになった。書くことで自分の感情をコントロールできるようになった。自分の思いを言葉にできるようになった。

書くことを探すようになった。日常的なことに感動とか発見を見つけられるようになった。他人のを読むことで、視点が変わった。

#### 参考：生徒の作品「カキナレのカキナレ」

はじめは宿題として書いていたカキナレで、うまかったカキナレしかクラスのみなに読まれなかった。だから、みんなちょっとうまく書こうとちょっとは気にしていたはずだ。自分もそうだ。(笑)でも、だんだん宿題ではなくなっていき、皆かかってに書きたいときに書いて、全員のカキナレが読まれた。そうなるにつれて、だんだん皆の個性がでてきて、素直になり、自分なりのスタイルが生まれてきた。今ではだいたい、文章を読むだけで、だれが書いたかがわかってしまうぐらいだ。皆全員違って、ハイテンションな文章もあれば、シリアスだったり、コミカルだったり。最初はいやいや書いていたカキナレが、今ではカキナレを書くのが好きだという人もいるだろう。自分は数えるほどしか書かなかったが、この1年友達のカキナレを読み、皆の心を少し垣間見ることができたと思う。

(交差点、信号機、排気ガスのおい)

初めは【めんどクサイ!】【何を書けばイイのかわかんない!】【もしカキナレに載ったら、みんなに読まれるの、ちょっとヤダ!】としか思ってなかったこのカキナレ。最近はこちらに書くのが1つの楽しみとまでなっちゃいました。

提出してノートがない時は『早く戻ってこないかなあ。』ってしょっちゅう思います。そういう時

はメールで送るのもいいんだけど、やっぱりどうしても自分の字で書きたい！と思うようになり、帰ってくるのを待ってます。最初の方は、嫌々ながらも（笑）がんばって書く話題を探してたけど、今じゃ思ったこと・感じることを素直に書けるようになりました。そして、それがカキナレに載ると、あたしの思った・感じたことをみんなにも読んでもらえて、ちょっと嬉しくなります。自分が書いたものが、授業中配られて、それを先生が読むのを聞いてると、すごく不思議な感じになります。自分が書いてる時とは、全然違ったようにも聞こえます。でもあたしはカキナレが大好きです！みんなの読むのも楽しいし、先生のコメントを読むのも楽しみです。あたしの書いてる内容がどんなにくだらなくても先生は必ずコメントを書いてくれるから。だからみんな、もっとカキナレ書こーよっつ。

（すまいりい）

カキナレで救われた事が何度あっただろう。カキナレ始めてから一年が経ち、そう思うことがある。自分の気持ちさえ解らなくなったり、いろんな事に迷ってしまい、路なんて前にも後ろにも見えない時、そのまんまの気持ちをカキナレてみる。僕にとってカキナレるということは、書くというだけの事じゃない。自分の言葉で自分の気持ちを表現し、先生とクラスのみんなに読んでもらって感想を聞く。ときにはディスカッションに発展する事さえある。そして新しい視点から改めて自分を見つめなおす。そういう事だ。人の気持ちほど移り変わりの激しいものもない。ましてやこの10代である自分の気持ちなんて10秒後には180°変わってしまっているなんてしょっちゅうだ。そんな事もカキナレて初めてわかった。そして、だからこそ、この気持ちを残してみたいと思うようになった。

そしていつも親身になって聞いてくれる GSS 高校クラスのみんなのお陰で、迷ったときこそ自分を探し出して自分を愛そうとする事ができるようになった。今までだったら自分の心の底で燻ってたもどかしさを、カキナレる事ができるようになった。ここでみんなに改めてありがとうと言いたい。

（明日はきつと言えないから）

傾向

- ① アメリカ生まれ：書き始めに時間が非常にかかる。カキナレに対しては、「まあまあ」という感想だが、英語の方が楽な言語になっている場合と英語でも書くことは嫌いな場合とがある。友達の作品を読むことで、語彙は徐々に増えている。語彙の少なさから生まれるシンプルな表現がむしろ言葉の重みを伝える。アメリカに根付いた生活による視点や考え方をクラスに提供している。自分の中の日本とアメリカを認識し、肯定できる内容をこれから期待したいが、書く事への苦手意識、他人に読まれることへの抵抗をどうなくしていくかが課題である。
- ② アメリカ滞在6～10年（小学生時に渡米）：書き始めやや時間がかかるが書き慣れると語彙の増加、表現力の向上が顕著（日本語能力の基盤ができているせいかな？）日米比較、日米で揺れる自分の存在価値に悩む内容多い。
- ③ アメリカ滞在4年以下（中学生時に渡米）：わりとすぐ書き始める。現地校での言葉のハンデから自分を表現できない欲求不満を解消するような、自己の内面を吐露する内容が多い。高度な文学性・創造性のあるものが書けるようになる可能性が高い。

#### 資料 1) アメリカ生まれの生徒作品

生徒 A: 愛はいったい何？ 愛はどんな気持ち？ 愛・・・。私には愛と言う意味は、愛している相手の心。愛はどこから来るのか。それは自分の心から来る。そしてその愛を育てるのはその相手。愛は一人では育てることはできない、愛は世界で一番めずらしい力だと思う。この力は人の思いや心を変えることができる。この前、友達の言った言葉をちゃんと聞いたとき、すっとした、体全体すっとした。友達は、ずうっと愛したい人を見つけたらその人を絶対にはなすなと言った。愛していると言ってふられても絶対にgive upするなと言われた。私はその言葉を聞いて好きな子にgive upしないと決めた。愛と言う言葉は体の中の心で友の心が一つの心になるという意味だと思う。一番気になるのはこの小さい言葉がなぜ大きい意味を持つのか？それはわからないけど小さくて良

かった。なぜなら愛が難しかったら愛は簡単じゃないと言う意味だと思うから。だから愛は小さくて強いから良かった。愛と恋、二つとも心が入っている。恋も愛も両方心が無いと、愛と恋は無い。人生の中で愛がいないと言う人は嘘を言っているか愛したことが無い人だ。忘れるのは心を亡くしているから、亡くした心が“忘れた”になったと思う。心は愛、愛は心、心がある人は愛がある。だからみんなは愛することが出来る。世界中に心が無い人はいない。愛はいつか世界を平和にすることができるだろう。そのときまでその愛を大きくするのに手伝ってください。誰かを今、愛しているなら勇気を出して愛していると言うのを頑張れ！

生徒 B: 僕は GSS を嫌いだと思ったことも多くありました。GSS を辞めたいと思ったこともありました。僕は日本で生活したことがないため、日本で暮らしていた子と比べると日本語はもちろん下手です。だから、僕は日本語をあきらめたかったです。でも、両親が GSS を辞めたらいけないと言っていたので、僕は辞めませんでした。(略) もちろん数学とか国語の授業を受けても来ましたが、それより GSS の授業とは僕にとっては日本社会とのつながりでした。小・中学校で勉強をしながら日本人だということがどんなことか分かってきました。高校生になって、僕が日本人として生まれてきたことを本当に嬉しく思えるようになりました。(略)

## 2) 在米 6~10 年の生徒作品

生徒 C:            落ち着かない。

                    居場所がない。

                    アメリカ———未だ異国の地。

                    日本——— 1 年に数週間だけいる所。

                    家はどこ。

                    友達とはしゃぐ。

笑う。楽しい。フリかも。

心はどこ。

何か違う。

何かが。

どこにいればいだろう。

生徒 D： 私は、今日、友達卒業パーティーに参加してきました。2 週間で日本人とアメリカ人のパーティーに 4 つも参加したせいか私は思います。日本なら普通「締め」という終わりがないだろうか？勝手に来て勝手に帰る、私は最後までいないからそう思うのだろうか？しかし、私が帰る頃には大概もう半数以下の人数になっている。来る時はまだしも、「さようなら」とだけ言って勝手に帰るのが私は苦手だ。「始まり」と「終わり」のある日本のパーティーが良い。私はなんとなくまだみんなが騒いでいる時に「もう帰るよ」となかなか切り出せないのだ。ちょくちょく人数が減ってきている時に帰るより、みんなが一斉に解散する時に帰る方がずっと楽だ。

日本人は意思表示が苦手だというが、「帰る」という意思が表せなければ帰れない。私は自分の中に日本人らしさを感じたような気がした。自分の国を知るには他国を知らなくてはならないとは正にこの事だと私は思った。

### 3) 在米 4 年以下の生徒作品

生徒 E： 暗闇が心を覆い

仮面が自分の顔を覆っていく

波に飲み込まれていく本当の自分

それを見下ろしているもう一人の自分

それは自分が消えてなくなる瞬間  
それは死と覚醒  
それは自分の知らない自分が産まれる瞬間  
僕は飛べない小鳥のよう  
もう、僕を助け、解き放てるのは君だけ  
ずっと待つよ 君が僕を見つけてくれるまで  
そして僕の心が光で満ちたら  
今度は僕が本当の君を探してあげる  
一緒に仮面をはずして歩いて行こう  
僕たちはもう自由なんだから

生徒 F :

**深淵**

心に潜むは ただ闇ばかり

目の前に近づけた 自分の指先さえも見えないような

全てを覆い隠す 暗闇だけ

僅かばかり残る希望も

時折思い出したように差し込んで消える 微かな光も

闇に解けた私を輪郭づける事すら出来ず

ましてこの闇を晴らす事 ままならず

闇が己に映すは 恐怖と戦慄

闇が己をもって覆うは 醜い真実

ただ其れのみ

貴方には解るまい

煌きの中に生きる貴方が 私を見るには

私の闇はきっと深過ぎる

**効果** ①文章表現能力の側面から：書く行為に抵抗がなくなり、語彙の増加や文法の正

確

性が見られるようになる。様々な修辞法の使用に慣れることから、表現力・言語感覚・

リ

ズム感が身に付く。読者を意識した推敲作業に慣れる。

②創造力の側面から：書く題材を自分で探すことで、創造力・表現の意欲が高まる。日

常生活の中で小さな事にも感動できる感受性が育つ。

③アイデンティティ形成の側面から：自分の内面とその変化を自分の言葉で整理し改

めて認識できる。書いたものを学級内に発信し、他人の意見を聞くことで、他者の中

の自分を認識できる。

④鑑賞の側面から：生徒主導による文法や表現に対する気付きができるようになる。ク

ラスメートの作品なので自主的な読みにつながり、読解理解がすなわち他者理解にな

る。

⑤クラス運営の側面から：自己の発信、他者を受信するというコミュニケーションによ

り、相手の立場や考えを尊重できる。10代特有の共通した悩みや興味を共感すること

で、連帯感、友情が芽生えクラスがまとまり、マルチレベルのクラス運営、授業展開

がし易くなる。

**問題点** 論理的なものに欠ける。口語体が抜けないが使い分けの問題でもあると思う。

この実践例（特にクラス内でのシェア）は授業内 5～10 分程度のものであり、他の小論文指導などで文語体による書く力を補充しているため、目的別に書き分けられることが大切だと考える。クラス内でいかに飽きさせないで維持するかも課題である。教師の負担が大きいですが、全体のクラス経営や授業展開において得られるメリットの方が大きい。

## V 以下は実践例 1 を補う意味での目的別書く作業の一例

### 実践例 2 小論文・読書感想文

目的：実践例 1 の問題点を補うために併行して行い、論文のストラテジーを学ぶ。

方法：日米の時事問題その他の教師が選んだトピックに関する記事などを読み、クラスで討論。（小論文のストラテジーを学習し上で）自分の意見をまとめ小論文にする。各自推敲作業し提出。教師による添削。添削を基にした推敲作業。清書した作品を、クラス内で発表。その場で感想を言い合う。発表者への良かった点・問題点を書き、教師と発表者に提出。

### 実践例 3 プレゼンテーション

目的：大学、就職後に必要なプレゼンテーションに慣れる。系統立てた分かりやすいレジュメのストラテジーを学び、リサーチした情報をまとめる能力を養う。

### 実践例 4 書記

目的：聞き取った内容をポイントを抑えてまとめる能力を身に付ける。討論の書記（教師に提出）。ディベートの際のメモ。

### 実践例 5 授業後の日記

目的：短時間でその日の自分を振り返り、文章にする練習。

## VI まとめ

「書く」こととそれをクラス内でシェアし合うことが、生徒同士の添削につながり、おのずと個人の推敲作業を増やす事になる。そうした一連の作業が彼らの語彙を増やし、表現力を豊かにするなどの言語能力の向上に結びついていく。また書く事が、10代の彼らにとって自分を見つめ、自己を知る作業でもあることから、自我の確立、ひいては円滑なクラス経営にも効果的である。特にバックグラウンドが様々で、マルチレベルのクラス場合、非常に有効と考えられる。

実生活に役立つ書く能力、自己表現の手段としての書く能力、各フォーマットに沿った

書く能力等、授業内でバランスよく取り入れる必要がある。そして、どの生徒も個人のレベルに合わせて、バランスよく書ける能力をいかに身につけさせるかがこれからの課題である。また、補習校、マルチレベルのクラスにおいて人格教育を念頭においた、国語教育と日本語教育、両方の教授法を教師がどうやって身に付け授業に活かしていくのかも、大きな課題であるとする。

参考文献：日本語教育 2000年7月106号「留学生と日本人学生の作文交換活動における個人心理過程」徳丸智子